

『萬葉集』の歌表記にみる活用の認識（下）

廣岡義隆

○キーワード＝活用語尾表記・表記史・続日本紀宣命・

関戸本古今集・元永本古今集

一 はじめに

当稿は当初倍近い紙幅を予定したが、『美夫君志』加藤静雄名譽會長追悼号への提出のために、前半を（上）として同誌へ投じた。ここに（上）篇の大意を記し、枕とする。

大伴坂上郎女の次の「跡見田庄作歌二首」（8・一五六〇～一）、

妹目乎始見之埜乃秋芽子者此月其呂波落許眞莫蕩目

吉名張乃猪養山尔伏鹿之孀呼音乎聞之登聞思佐

この歌について仮名表記箇所を平仮名にし、訓添えと考えられる箇所に片仮名加筆し、ルビ訓を付すと次のようになる。

妹目目を始見の埜の秋芽子は此月ごろは落こすなゆめ

吉名張の猪養ノ山に伏鹿の孀呼音を聞がともしき

現在は一 般に、

妹目目を始見の埜の秋芽子は此月ごろは落りこすなゆめ

吉名張の猪養ノ山に伏す鹿の孀呼ぶ音を聞くがともしき

のように、活用語尾を明示して表記するが、原文にそうした語尾明示は無く、萬葉原歌表記のままにルビ表示したものである。「此」字を「此ノ」とするのではなく、「此」としたことにについては別稿で言及したので、今は詳述を省く。このように、『萬葉集』で用言「落」「伏」「呼」「聞」は、活用語尾を明示することなく、「ちり」「ふす」「よぶ」「ぎく」と読む。

こうした活用語尾の無表記については、蜂矢宣朗氏、築島裕氏、沖森卓也氏、奥田俊博氏の先行研究がある。

この語尾無表記を軸に山上憶良「貧窮問答歌」（5・八九二）の長歌における「寒」「作」の訓について、活用語の観点から考察し、また「竹取翁歌」（16・三七九）の長歌における文字表記から見た訓法上の問題についても考察した。

次の「家持の長歌作品から」（上）篇と重複するが、続く『古今和歌集』との関係から、一部省略した形で重載する。

二 家持の長歌作品から

次は、越中国に単身赴任中の大伴家持が都にいる妻を思つて

詠んだ「述戀緒歌一首」の長歌作品である（反歌四首は略）。

妹毛吾毛 許己呂波於夜自 多具敵礼登 伊夜奈都可之久
 相見⁵婆 登許波都波奈尔 ……中略… 17 別来¹⁷之 曾乃日乃
 伎波美 荒璞能 登之由吉我敵利 春花乃 宇都呂布麻泥
 尔 相見¹⁸祢婆 伊多母湏敵奈美²⁵之伎多倍能 蕪泥可敵之
 都追 宿夜於知受 **伊米尔波見礼登** 宇都追尔之³⁰多太尔
 安良祢婆 孤悲之家口 知敵尔都母里奴 近在者 加敵利
 尔太仁母 ……中略… 45 霍公鳥 来鳴⁴⁵牟都奇尔 伊都之加母
 波夜久奈里那牟 宇乃花能 尔保敵流山乎 余曾能未母
 布里佐氣見都追 淡海路尔 伊由伎能里多知⁵⁵青丹吉⁵⁵
 奈良乃吾家尔 ……中略… 63 吾乎麻都等 奈湏良牟妹乎⁶⁵安
 比氏早見⁶⁵牟 (17・三九七八)

この歌について「奈良」の地名は別として、仮名表記箇所を平仮名にして示すと次のようになる。

妹も吾も ころはおやじ たぐへれど いやなつかしく
 相見⁵ば とこはつはなに 情ぐし めぐしもなしに はし
 けやし あがおくづま 大王の みことかしこみ あしひ
 きの やまこえぬゆき あまざかる ひなをさめにと 別
 来¹⁷し その日のきはみ 荒璞の としゆきがへり 春花の
 うつろふまでに 相見¹⁸ねば いたもすべなみ したたへの
 そでかへしつづ 宿夜¹⁸おちぢず **いめには見れど** うつつ
 にし ただにあらねば こひしけく ちへにつもりぬ 近
 在¹⁷ば かへりにだにも うちゆきて 妹がたまくら さし

かへて ねてもこましを たまほこの 路はしとほく 關
 さへに へなりてあれこそ よしゑやし よしはあらむそ
 霍公鳥 来鳴⁴⁵むつきに いつしかも はやくなりなむ う
 の花の にほへる山を よそのみも ふりさけ見¹⁷つつ 淡
 海路に いゆきのりたち 青丹吉⁵⁵ 奈良の吾家に ぬえ鳥
 の うらなけしつづ した戀に おもひうらぶれ かどに
 たち ゆふけとひつづ 吾をまつと なすらむ妹を あひ
 て早見⁶⁵む

漢字表記の活用語を拾うと次の通りである。

- ・ 見礼 (第二八句) の「み^レれ」——**当面の事例**
- ・ 相見 (第五句) の「あひ^レみれ」——相見ば
- ・ 別来 (第一七句) の「わかれ^レこ」——別来し
- ・ 相見 (第二三句) の「あひ^レみ」——相見ねば
- ・ 宿 (第二七句) の「ぬる」——宿夜おちぢず
- ・ 近在 (第三三句) の「ちかく^レあら」——近在ば
- ・ 来鳴 (第四六句) の「き^レなかな」——来鳴むつきに
- ・ 見 (第五二句) の「み」——ふりさけ見¹⁷つつ
- ・ 吉 (第五五句) の「よし」——青丹吉⁵⁵
- ・ 早見 (第六五句) の「はや^レみ」——あひて早見⁶⁵む

以上、接続に応じて活用を対応させて読む様を見て取ること
 は従前通りである。こうした中で、第二八句「伊米尔波見礼登」
 の「見礼」は第五句と対比して不統一である。これは「見」が
 漢字(訓字)としてあるのではなく、訓仮名として使用された箇

所であると理解するのがよい。即ち、翻字は「みれど」と表示すべき箇所になる(第五二句「見」は訓漢字か訓仮名か、明らかでない)。大伴家持作品を出した理由は、文字表記実態が次代の『古今和歌集』の文字表記と大きく齟齬しないからである。こうしたことについて、当稿の眼目である活用語の語尾表記という観点に絞って、『古今和歌集』を例に以下で見る。

三 関戸本『古今和歌集』から

平安時代における『古今和歌集』本文の実態を窺い見ることが出来るとされる一一世紀半ばすぎの関戸本『古今和歌集』により、活用語の語尾無表記例を採用する。

ひとはいさ心も不知むめの花はなそむかしの香に、ほひける
(1・四一、天1折)

*は「むめの花」の箇所の右傍書に「ふるさと」とあり、その傍書は「は、」に続く形になる。

よみひと不知
梅ノ香ヲ袖に移シテ留メテハ春ハ過トモ
かたみならまし

散ト見テあるへきものをむめの花うたてにほひのそてにと
(1・四六、天3折)

まれる
秋の夜の月の光し赤ければ暗ふの山も越ぬへらなり
(1・四七、天3折)

(4・一九五、天14折)

秋野、に人待虫の音すなり我かと行ていさとふらはむ
(4・二〇二、天16折)

待人に不有ものからはつかりの今朝なくこゑのめつらし
きかな
(4・二〇六、天17折)

たえず行明日香のかはよとみなはこゝろあるとや人の
おもはむ
(14・七二〇、地10折)

以下に活用語尾を表記しない例を列挙する。

四二番歌「不知」の「しらず」——いさ心も不知

四六番歌詞書「不知」の「しらず」——よみひと不知

四六番歌「過」の「すぐ」——春ハ過トモ

四七番歌「散」の「ちる」——散ト見テ

一九五番歌「越」の「こえ」——越ぬへらなり

二〇二番歌「待」の「まつ」——人待虫

二〇二番歌「行」の「ゆき」——我かと行て

二〇六番歌「待」の「まつ」——待人に

二〇六番歌「不有」の「あらぬ」——不有ものから

七二〇番歌「行」の「ゆく」——たえず行明日香のかは

右のように、活用語尾の無表記は『萬葉集』と変わるところが無い。「不知」や「不有」の例は動詞箇所の「しら」「あら」になる。ただし、四六番歌では、「移シ」「留メ」と語尾表示がある。或いはこれは宣命小書体と関連があるのかも知れない。なお、この四六番歌における仮名小書を無視すると、「梅香袖移留春過かたみならまし」となり、第一〜第四句は『萬葉集』

の柿本朝臣人麻呂歌集略体歌における書記方式になる。

四 元永本『古今和歌集』から

元永本は仮名序を含め全巻が完存する『古今和歌集』の写本(国宝)で、元永三年(一一二〇)七月廿四日の奥書が存する。手は藤原行成の孫定実とされる。以下は書芸文化院から出ている「巻第八」により活用語の語尾無表記例を採取する。

読人しらす

すかるなくあきの萩原あさたちてたひ行人をいつとかま

たむ (8・三六六、1折)

惜むからこひしき物を白雲の立南後はなに心地せむ

(8・三七一、4折)

あふ坂にて人をわかるとて讀る

(8・三七四詞、5折)

からころもたつとはきかししら露のおきてし行はけぬへ

(8・三七五、6折)

きものをあひしりて侍りける人のあつまにまかれりけるをおくり

(8・三七八詞、8折)

侍りとてふかやふ (8・三七九詞、9折)

とものあつまへ罷時 良岑秀岡 (8・三八〇詞、9折)

みちのくにへ罷る人につかはす 貫之 (8・三八〇詞、9折)

しらくものやえにかさなをちにても思はむ人にこゝろへ

(8・三八〇、10折)

人になわれ侍る時 つらゆき

わかれてふ事はいろにもあらなくに心に染てわひしかる
覽 (8・三八一、10折)

或人こしにまかりて経年月未有てきて又かへり罷ける時 躬恒

かへる山なにそはありて有かるは来てもとまらぬ名にこそありけれ * は不鮮明 (8・三八二、11折)

よそにのみ恋やわたらむ白山のゆきみるへくもあらぬ我身を (8・三八三、12折)

おとは山のほとりにて人にわかるとて讀る つらゆき
おとは山こたかくなきてほとゝきすきみかわかれを惜む
へらなり (8・三八四、12折)

人やりのみちならなくに大方はいきうしと云ていさかへ

南 * 「いさかへりなむ」の「り」の欠 (8・三八八、16折)

甘南備の社にて今はかへりねとさねか云ければ 兼茂

* さね 一首前の歌の作者源さね (8・三八九詞、16折)

藤原これをか武藏介になりてくたりける時會坂まで

送て 貫之

かつこえてわかれもゆくかあふさかを人たのめなる名に

こそ在けれ (8・三九〇、17折)

大江千里古かおきへまかりける時馬のはなむけに讀る

* 「里」を見せ消し「古」と修訂 (8・三九一詞、17折)

君か行こしの白山しらね軻雪の間にくあとはたつねむ

(8・三九一、18折)

山風に桜吹_レ蒔_レ亂_レ南花のまきれにたちとまるへく

(8・三九四、20折)

をしむ覽人のこゝろを知ぬまに焔のしくれと身にふりにける

(8・三九八、22折)

あかすしてわかれしそでのしらたまはをきみかゝたみとつゝみてそ行 *「は」見セ消_レチ「を」に (8・四〇〇、24折)

かきりなく思なみたにそほちぬるそてはかはかしあはむ日までに (8・四〇一、24折)

しかの山こえに石ゐの卒にて物云ける人のわかれるによめる つゆき

むすふてのしづくにゝこる山の井のあさくは人に別ぬる *「飽」は「飽」 (8・四〇四、26折)

みちに有ける人の車に物を云つきてわかれる所にて 友則

したの帯のみちは方々別るとも行めぐりても逢とそ思 *□は不鮮明 (8・四〇五、27折)

三六六番歌の詞「讀人しらず」の「讀」における「よみ」は他例があるが、この冒頭例を代表として挙げ、他例を略している。以下、語尾を表示しない例を列挙する。

三六六番歌「行」の「ゆく」——たひ行人を

三七一番歌「立」の「たち」——立なむ後は

三七四番歌詞書「讀」の「よめ」——讀る

三七五番歌「行」の「ゆけ」——おきてし行は

三七九番歌詞書「罷」の「まかる」——罷時

三八一番歌「染」の「しみ」——心に染て

三八二番歌詞書「経」の「ふる」——経年

三八二番歌詞書「有」の「あり」——有て

三八二番歌詞書「罷」の「まかり」——罷ける時

三八二番歌「有」の「ある」——有かゝるは

三八三番歌「恋」の「こひ」——恋やわたらむ

三八四番歌詞書「讀」の「よめ」——讀る

三八八番歌「云」の「いひ」——いきうしと云て

三八九番歌詞書「云」の「いひ」——云ければ

三九〇番歌詞書「送」の「おくり」——送て

三九〇番歌「在」の「あり」——名にこそ在けれ

三九一番歌詞書「讀」の「よめ」——讀る

三九一番歌「行」の「ゆく」——君か行こしの白山

三九四番歌「吹」の「ふき」——桜吹蒔_レ亂_レ南

三九四番歌「蒔」の「まき」——桜吹蒔_レ亂_レ南

三九四番歌「亂」の「みだれ」——桜吹蒔_レ亂_レ南

三九八番歌「知」の「しら」——知ぬまに

四〇〇番歌「行」の「ゆく」——つゝみてそ行

四〇一番歌「思」の「おもふ」——思なみたに

四〇四番歌詞書「云」の「いひ」——物云ける人

四〇四番歌「別」の「わかれ」——別ぬるかな飽

四〇五番歌詞書「有」の「あり」——有ける人

四〇五番歌詞書「云」の「いひ」——云つきて

四〇五番歌「行」の「ゆき」——行めぐりても

四〇五番歌「逢」の「あはむ」——逢とそ思

四〇五番歌「思」の「おもふ」——逢とそ思

右の内、四〇五番歌「逢」は、「あは」だけで挙例に該当するが、当例は助動詞「む」まで略記される。「あはむとそおもふ」の句は当歌だけであるが、他に『古今和歌集』には、「あはむといはなむ」(12・五六八)、「あはむとおもへば」(19・一〇〇一)、「あはむともせず」(14・七一九)、「あはむとやみし」(5・二七二)、「あはむひまでに」(8・四〇二)の例があり、一〇〇一番歌の長歌を含め全て結句に置かれる慣用的な詠法としてあるところから、当歌における「む」の略記があるのであろう。

三九四番歌は僧正遍昭の歌で、「山風に桜吹蒔亂南」は「山風に桜吹き蒔き乱れなむ」の表記であるが、漢字連鎖の技巧であらうか。これに似る歌に紀貫之の三七一番歌「白雲の立南後は」の「白雲の立ちなむ後は」や凡河内躬恒の三八二番歌詞書「経年月末有て」の「経る年月末有りて」の例がある。

ただし、凡河内躬恒の三八二番歌詞書の箇所は、流布本とは大きく本文が異なり、冒頭の「或人」の箇所は「あひしれりける人の」(伊達家本)とあり、「経年月末有て」の箇所は「としへて」(伊達家本)と異り、何らかの事情が介在するかも知れない。

活用語尾の無表記例を挙げたが、語尾を明示する例については二重傍線を付して示した。八か所ある。この内、「侍り」(三七八

番詞)「侍る」(三八一番詞)で三か所あるが、三七八番歌詞書二例の内、後例の「侍り」には何らかの誤写が介在する。

五 宣命から

宣命の中でも「続日本紀宣命」に限り、それも瞥見するにとどめる。永山勇¹⁰⁾氏は、「宣命書きと詞・辞の識別」の「動詞」の条で、「動詞については、語幹を大字で、活用語尾を小字で記さいするのが原則である」(九五頁)と指摘する。しかしながら、以下は第一詔¹¹⁾での確認例であるが、語尾表示する語は少ない。該当語を列挙すると以下の次第である(重出例は初出例で代表させ、重複記載をしない、出現順)。

ヨサス四段——依^之

タマフ四段——賜^比・賜^布・賜^幣

タマハル——賜^利

メス——行^佐

マツル——奉^礼

形容詞ク活——貴^支・高^支・廣^支・厚^支・無^久・明^支・淨^支・直^支

「マツル」とする事例の「マツレラム」の句は、「奉る」の命令形「マツレ」に完了の助動詞「り」が接合し(現実には連用形マツリにラ変アリが接合し、iとaの母音結合によりe甲類となったものであり、規範文法での命令形に相当する。四段活用の已然形はe乙類になる)、

それに助動詞「む」が接続した語形である。

小谷博泰氏は、宣命第一詔で送り仮名の送られているのは、助動詞は「ム、シ」、形容詞活用語尾は「ク、キ」であるとし、動詞・補助動詞の語尾表記について次のように指摘する。

動詞、および補助動詞の場合は、一見、無原則に送り仮名がなされているようだが、活用形によって違いがあり、まとめると次のようなことが見られた。

(一) 「所知」「詔」「聞食」のように、…中略…慣用句の中で、…中略…省略されやすい。(詔によっては、補助動詞までも省略されることがある。)

(二) 終止形、連体形、命令形は送り仮名が省略されやすい…下略…。

(三) 連用形は…中略…、「授賜_比負賜_布」のように活用語尾が記されることもあれば、「讚賜上賜」のように省略されることもある。

(四) 「所」「将」など、辞に当たる語が漢字(真名)によって指定されている場合は、動詞の送り仮名は、…中略…省略され…下略…。

(五) ク語尾と助動詞「リ」は、活用語尾に準じるものがあるが、「所思行_{佐久止}」「任賜_{幣留}」と、仮名で表記される。特に助動詞「リ」は、活用語尾とまぎらわしいので、動詞の語尾(命令形に相当)から送られ、たとえば「賜へる」を「賜はる」と読み誤らないようにしてある。

(六) 「依_よ」に連用形語尾シが送られているのは、「依」を「よす」と読み誤らないためであろうか。…下略…。

一方、活用語尾が明記されない事例について、補助語を含めて挙げると以下のようなことになる。前項同様に重複記載はしない、出現順。

「所知」(シラシメス)、「詔」(ノリ)、「集」(ウゴナハリ)、「侍」(ハベル)、「聞」(キキ)、「食」(タマヘ)、「始」(ハジメ)、「至」(イタル)、「坐」(マサ・マス・マシ)、「繼」(ツギ)、「将知」(シラム)、「奉」(マツリ・マツレ)、「授」(サツケ)、「負」(オホセ)、「受」(ウケ)、「恐」(カシヨミ)、「食」(ラス)、「調」(トトノヘ)、「平」(タヒラゲ)、「恵」(ウツクシビ)、「撫」(ナデ)、「所思」(オモホシ)、「敷」(シキ)、「行」(オコナヒ)、「治」(ヲサメ)、「任」(マケ)、「過」(アヤマチ)、「犯」(ヲカス)、「以」(モチ)、「稱」(ハカリ)、「緩」(ユルヒ)、「怠」(オコタル)、「務」(ツトメ)、「結」(シマリ)、「仕」(ツカヘ)、「悟」(サトリ)、「将任奉」(ツカヘマツラム)、「讚」(ホメ)、「賜」(タマヒ・タマハ)、「上」(アゲ) / 形容詞「欸」(イソシク)

右のように活用語尾が明示されない例は数多い。右で示した訓は通訓であり、この訓が当時のものかどうかは確かでないが、活用語尾の略記自体は右の挙出例で明らかであり、語尾略記が通常形態であり、前記の語尾明記例が特に示された事例であることが判明する。「賜」は「タマフ」と「タマハル」との区別を明示したものであること、小谷氏の指摘にあり、「依」の「ヨサス」や「行」の「メス」も訓読上の便宜であろう。形容詞の

諸例については、蜂矢宣朗氏「萬葉集における活用語尾の表記―形容詞の部―」¹⁴⁾において、

形容詞には、全般に語幹の獨立用法があつて、この點からはすべての形容詞に、語尾が表記される可能性がある

という指摘が要を得ており、これは「続日本紀宣命」にも該当する。

築島裕氏¹⁵⁾は「続日本紀宣命」における活用語尾の仮名表記例が比較的多いことを指摘する。

奥田俊博氏は「続日本紀宣命における活用語の語尾表記」¹⁶⁾において、活用語尾表記する語は「一四一語、延べ七七八例」とし、語尾「ル」「レ」は付加的要素と意識されたこと、近似語形との弁別、活用形明示の必要性に加え、文末明示、接続関係の明示、並列関係の明示があるとし、「続日本紀宣命」においては「語尾表記を付す志向」が先行すると共に、「語形を明示する程度」の選択的な志向¹⁷⁾へと向かう段階も確認出来るとする。

六 おわりに

『萬葉集』について訳文などと称される漢字かな混じりの読みを示す場合に、どのように表示すれば良いのかというのが私における当初の事案であった。それは『萬葉集』の表記のままにし、仮名表記される箇所に限って平仮名に置き換えるのがよいという結論に落ち着いた(ただし、訓み添え箇所については、加筆表

示する)。そうした時に、『萬葉集』当時にあつて、前後の接続から活用語を自在に活用させて、当時の人々は萬葉歌を読み得ていたことが明らかになる。文法・活用の種類などという高度な活用概念や文法体系概念の把握理解は別として、

熟田津に船乗せむと月待ば潮もかなひぬ今はこぎいでな
という額田王の一首(一・八)において、「船のりせむと」「月
まてば」と読み得たのであり、

春過て夏来らし白妙の衣乾有天の香来山

という持統天皇の一首(一・二八)において、「春すぎて」「夏きたるらし」「衣ほしたり(衣ほしてあり)」と読むことが出来たのである。そのことは「乗」字を「のら・のり・のる・のれ」、「過」を「すぎ・すぐ・すぐる・すぐれ」、「有」を「あら・あり・ある・あれ」と、前後の接続に合わせて理解し、読むことが出来たことを意味する。即ち、文脈理解¹⁸⁾による活用語の語形認識が出来たことになる。この基には訓が或る程度に定着していたことを証することになる。このことにつき、龜井孝氏に次の発言がある。

(古事記において訓注の施していない漢字は、訓注なしでも、一定の文脈においてそれをヨム(クンに還元する)ことのできるものであることを意味してゐる。いひかへれば、ヤスマロは、そのやうな、クンから文脈全体をコトバにもどす操作、かりに、それをヨミとよぶならば、このヨミの操作の上に立つて古事記をよむ(理解する)ことを読者に期

待しながら、その本文を書いたものと推定される。

とし、その続きに『萬葉集』の訓について、

(万葉集において) 当時におけるクン、——すなはち、和訓——の固定をうかがわしめる。

と言及する。留意してよい。

活用を江戸時代には「はたらく」と言い、活用語を「はたらくことば」と称したが、上代にそういう確かな活用概念が存在したかどうかは明らかでないが、難訓歌等の特別な事例は別として、原則として歌は読み得たと言い得るのである。

右の件と共に、現代において萬葉歌を和らげ示す場合には、熟田津に船乗せむと月待ば潮もかなひぬ今はこぎいでな春過て夏来らし白妙の衣乾有天の香来山

とルビ形式で活用語尾を表示するのが原文を重んじた歌の表記になると結論付けるものである。

【註】

- (1) 廣岡義隆、「萬葉集の歌表記に見る活用の認識(上)」(『美夫君志』第九九号、未刊。二〇一九年中の刊行予定)。
- (2) 刊行予定の『萬葉形成通論』の第二部第四章第四節「坂上郎女の田廬景物詠」で言及する。
- (3) 蜂矢宣明氏「萬葉集における活用語尾の表記―動詞の部―」(天理大學『山邊道』第六号、一九六〇年三月)。同氏「萬葉集における活用語尾の表記―形容詞の部―」(『山邊道』第七号、一九六二年二月)。築島裕氏「万葉集の動詞の語尾表記について」(『萬葉集研究』第一二集、一九八四年四月)。「築島裕著作集」第五卷「音韻と表記史」所収予定。

沖森卓也氏「万葉集における動詞活用語尾の表記」(初発、一九九六年六月)。同氏「日本古代の表記と文体」に補訂所収。吉川弘文館。所収書による。奥田俊博氏「万葉集」における活用語の語尾表記」(『国語文字史の研究』五、二〇〇〇年五月)。同氏「古代日本における文字表現の展開」所収)。

(4) 「青丹吉」の「よし」は間投助詞「よ」「し」に由来するものであるが、形容詞「よし」と理解されて使用され、表記されている面がある。このことについては、刊行予定の『萬葉形成通論』の第一部第六節「ヨシ型枕詞の生成と展開」を参照されたい。これが純粹な表記である場合は「よき」と活用するところ、枕詞アヲニヨシの表記に充当させており、借訓語の側面を有するが、形容詞「よし」と理解されて使用されたとした通り、讚美の語としての「吉」の性格があり、その意味で形容詞終止形で名詞接続する古姿を含有するものである。

(5) 浅田徹氏「元永本古今集を読むために―表記史と書道史―」(『国語文字史の研究』十二、和泉書院、二〇一一年三月)の中に、秋永一枝氏、築島裕氏、小林芳規氏の先行研究によりつつ、「和歌は仮名で書くのを本義」としたという指摘がある。これによると以下の『古今和歌集』の例にダイレクトには接続しないことになるが、そのことを踏まえても、活用語の漢字表記における語尾表示に関しては、『萬葉集』から連接する側面を有する。なお、尾山慎氏の近著「二台仮名の研究」(和泉書院、二〇一九年二月)の四四一頁に元永本「古今集」における漢字使用に関する言及がある。

(6) 飯島稻太郎氏編「伝藤原行成筆関戸全古今集」天・地二冊。解説、飯島春敬氏。平安朝かな名蹟選集第二巻・第三巻(書芸文化院、一九七〇年一〇月重版による)。

(7) 解説は、神崎充晴氏「古今和歌集(元永本)」(『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九年三月、分担執筆)による。

(8) 飯島稻太郎氏編「伝源俊賴筆元永本古今集巻八」平安朝かな名蹟選集(書芸文化院、一九七〇年)。

(9) 首巻と尾巻の巻第一・巻第廿においては、和歌に漢字をほとんど交え

- ないで書写されることが指摘されている。註(5)の浅田徹氏論、参照。
- (10) 永山勇氏『國語意識史の研究』(風間書房、一九六三年三月)。
- (11) 『続日本紀宣命』の本文は、北川和秀氏『続日本紀』校本・総索引(吉川弘文館、一九八二年一月)を参照し、私に本文修訂して使用する。
- (12) 冲森卓也氏『万葉集における動詞活用語尾の表記』(註3)に同じで、続日本紀宣命における助動詞リの表示は、その「二つ前の音節から表記される」ことが原則となっているとし、「任賜幣」などの例を挙げる。「賜比」「賜布」は該当しないが、「賜幣」はこれに該当する事例としてある(同氏所収書、一七〇頁)。
- (13) 小谷博泰氏「宣命の文章と表記―翻訳文ならびに漢字仮名交じり文として―」(奈良教育大学国文 第六号、一九八三年三月、同氏「木簡と宣命の国語学的研究」所収、『小谷博泰著作集』第一巻所収)。
- (14) 蜂矢宣朗氏「萬葉集における活用語尾の表記―形容詞の部―」(註3)に同じ。
- (15) 築島裕氏「万葉集の動詞の語尾表記について」(註3)に同じ。
- (16) 奥田俊博氏「続日本紀宣命における活用語の語尾表記」(『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第二号、二〇〇〇年三月、同氏「古代日本における文字表現の展開」所収)。
- (17) 池上禎造氏は「萬葉集はなぜ訓めるか」の中において、「現代と比べてみれば、假名交文の假名の部分も皆漢字で、おまけに送假名にきまりが無いとでもいつたところだから」と言及する。池上禎造氏「萬葉集はなぜ訓めるか」(『萬葉』第四号、一九五二年七月)。
- (18) ここで使用する「文脈」は、小松英雄氏が包括的な指摘として、「鳴」字が、ナク／ナルの両方に当てられていても、文脈が与えられれば、事實上、判断に迷うことはない。だからこそ、現在でもそのように使用されている(小松英雄氏『日本語書記史原論』総説「日本語書記史と日本語史研究」一二頁)とある言及が参考になる。
- (19) 龜井孝氏「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題―」(『古事記大成』3言語文字篇、平凡社、一九五七年一月)と、龜井孝論文集4『日本語のすがたところ』(二)所収。
- (20) この言及とほぼ同趣旨の内容を、龜井孝氏は「万葉集がよめるのは、すでに奈良時代以前に漢字のよみというものが因襲化したかたちで固定をみていたからである」と発言する。龜井孝氏「万葉集はよめるか」(『美夫君志』第七号、一九六四年六月、かめいたかし氏「ことばの森」所収)。
- (21) 鈴木眼の『活語断續譜』『言語四種論』(共に、享和三年(一八〇三)頃成)に「ハタラク」(二八六頁・二九九頁)「ハタラク詞」(三一二頁)の語が見える(頁数は次に示す「鈴木眼」より)。岡田稔氏「市橋鐸氏「鈴木眼」(鈴木眼顕彰会、一九六七年一月)。岡田稔氏「伝記と論考」の「近古以前の品詞分類意識」の「奈良朝以前」(二〇六頁)条に、当稿と関係する事項の記載が若干ある。
- (22) 上代文献を読む会において、当稿素案を披露し教示を求めた時に、井ノ口史氏より、読み手の活用認識と共に、書き手における問題も考えなければならぬのではないかという提起があり、「一定の概念認識の下に書いていたのではないか」という発言があったことを記し留めておく。この書記レベルの問題は指摘の範囲において肯うところである。当初稿には記していなかったが、龜井孝氏(註19)に同じに『古事記』に關して書記者側(太安萬侶)に立つての発言がある。このように、読み手の活用認識と書き手における認識とは表裏の関係にあることは間違いない。ただ目下は、この問題についてこれ以上立ち入らないことにする。
- (23) 註(2)で示した『萬葉形成通論』において、原文を和らげて示す場合には、この方式で表示した。
- 『付記』当論について、尾山慎氏から浅田徹氏論等々に関する教示、鈴木喬氏から小谷博泰氏論等々に関する教示を賜った。ここに記し、衷心より御礼を申し上げる。その後、上代文献を読む会(二〇一八年一月二四日)の席において、井上幸氏、井ノ口史氏、桑原祐子氏、辻憲男氏、中川ゆかり氏、宮川久美氏、村瀬憲夫氏の各氏(当日出席者)から種々の教示を賜った。記して謝意を表したい。